

正倉院の屏風について

松 島 順 正

はじめに

屏風は、風を防ぎ物を遮りまた装飾として用いる具で、遠く中国漢代に発するといわれている。わが国では、天武天皇の朱鳥元年の新羅からの貢上品中に屏風があるのが初見である。いまそれらの屏風がどのような形態のものであったか知る由もない。

正倉院には、奈良時代の屏風が多く遺存している。いうまでもなくこれらの屏風は、聖武天皇の遺物として東大寺盧舎那仏に奉献されたものであって、屏風遺品としてはおそらく最古のものである。しかしながら、これら伝存の屏風も夙に破損朽壞して、旧状を保つものは一帖も存しない。ただその中の鳥毛篆書屏風と鳥毛帖成文書屏風の二帖十二扇は、元禄度・天保度の修理により一応屏風としての体裁を保っているが、改装の結果当初そのままの姿ではない。

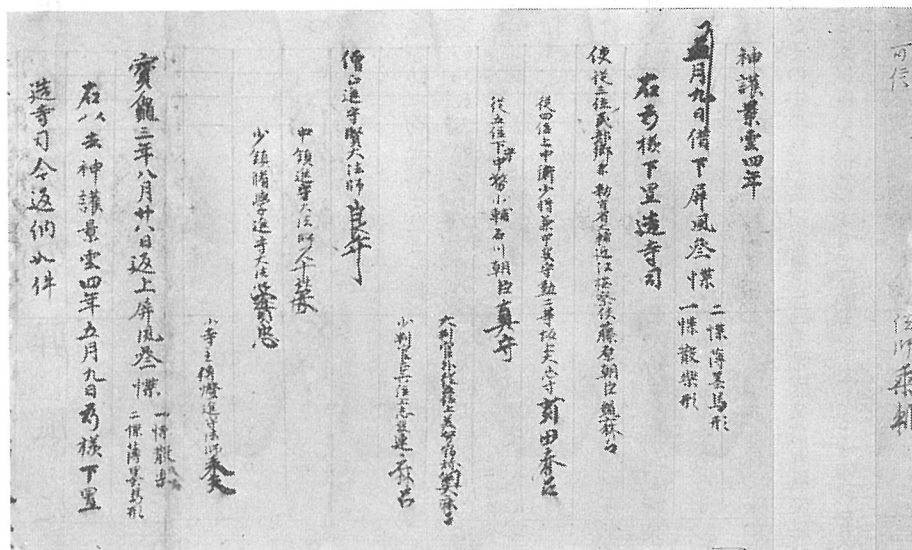
正倉院伝存の屏風は、このような現状であるが、当時の献納目録であ

る献物帳が存し、それには屏風の名称、寸法、装幀などが比較的詳しく記されており、また一方残存屏風とはいえなお所々に旧状の窺うべきものがあって、両々相俟って当時の屏風の実態を知ることができるのである。以下、正倉院屏風の由緒やその後の出入の経緯および屏風の装幀構造などについて述べることにしたい。

一 献納屏風

献物帳によると、多数の屏風が東大寺に献納されたことが知られる。

すなわち天平勝宝八歳六月廿一日献物帳（国家珍宝帳）には屏風一百畳を載せ（図版1）、その内訳は画屏風二十一畳、鳥毛屏風三畳、鳥書屏風一畳、夾纈屏風六十五畳、藤纈屏風十畳である（珍宝帳には畳、出蔵文書には帖または襖とある。以下資料引用の場合を除き、帖の字を用う）。その殆んどは一帖六扇よりなるいわゆる六曲屏風で、画屏風中の古人画屏風二帖だけが一帖四扇の四曲屏風である。次いで同年七月廿六



挿図1 双倉北物用帳

日献物帳（屏風花氈等帳）には、欧陽詢真跡屏風二帖十二扇と臨王羲之諸帖書屏風二帖十二扇の書屏風四帖を載せ、また天平宝字二年十月一日献物帳（藤原公真蹟屏風帳）には藤原不比等真跡書屏風二帖十二扇を載せている。以上献納された計百六帖の屏風が他の宝物と共に正倉院に収蔵されていたことは、延暦六年宝物を曝涼点検した時の報告書である曝涼使解（以下曝涼帳という）に記されているとおりである。

二 屏風の出入

双倉北物用帳によれば、献入後数年を経た天平宝字六年十二月十四日に欧陽詢真跡屏風二帖が出蔵されている。これは道鏡禪師所が借用したのであって、翌々八年七月二十七日に返納している。この一年半以上にわたる長期の借用の目的は詳らかでないが、あるいは道鏡が習字の手本として借りたのではないかと想像される。しかし正倉院文書中に遺る彼の二、三の筆跡には欧書の影響を見出すことはできないといわれる。その後この屏風は、延暦六年の曝涼帳には載せてあるが、同十二年の曝涼帳には見えない。おそらくこの間に出版されたものと思われ、その後還納のことがなかったのであろう。

次いで神護景雲四年五月九日に屏風三帖が「様」すなわち「てほん」として造寺司に下し置かれ、「二牒薄墨馬形」、「一牒散楽形」と双倉北物用帳（挿図第1図）に注記されている。この屏風は、献納屏風中のも

のか否かはにわかに決め難いが、おそらく珍宝帳所載百帖中のものであろう。すなわち「散楽形」と注する一帖は、同帳画屏風中の大唐勤政楼前観楽図屏風に当ると考えられる。なぜならば後に述べるように、弘仁五年九月十七日に珍宝帳所載の画屏風を全部出蔵した時の名称に散楽一帖とあるものが、大唐勤政楼前観楽図屏風に比定されるからである。次に「二牒薄墨馬形」のうちの二帖を同帳画屏風中の舞馬屏風に擬する説があるが、舞馬屏風が薄墨絵であったかどうか珍宝帳の記載だけでは明らかにすることはできないし、また馬形とあるだけで、直ちに舞馬屏風に当てることも躊躇せざるを得ない。しかも双倉北物用帳の注記に「二牒薄墨馬形」とあるから、おそらく珍宝帳にいうところの「一具兩疊」すなわち一雙のものであらうと思われる。そこで珍宝帳の画屏風中に薄墨絵らしいものを求めると、素画夜遊屏風二帖がある。素画とは、白画すなわち白描画を指し、彩色を施さない墨画をいう。素画夜遊とある画題からは、そこに馬形が描かれていたかどうか知ることはできないが、この屏風が弘仁五年九月に出蔵せられたにも拘らず、その袋は現存していて「散楽夜遊□形」の墨書がある。肝心な文字のところが破損磨滅して読みとることができないが、闕字が「馬」とすれば、この薄墨馬形二帖は散楽夜遊馬形屏風と推定され、同時出蔵の散楽形一帖と共に散楽図屏風であったと推定されるのである。この三帖の屏風は宝龜三年八月二十八日に還納されている。

さて双倉雑物下帳によれば、弘仁五年九月十七日に屏風三十六帖が鎮

子とともに出蔵沽却されている。すなわち珍宝帳所載の画屏風二十一帖、鳥書屏風一帖、夾縹屏風十帖と屏風花氎等帳および藤原公真蹟屏風の書屏風各二帖とである。同下帳にはその品目を列記してあるが(挿図第2図)、献物帳の名称と違うものが多いので、献物帳と対比した表(第一表)をつぎに掲げた(本節末尾)。なお同表には斉衡三年雜財物実録に記するところの屏風とその数量を掲げ参考に供した。

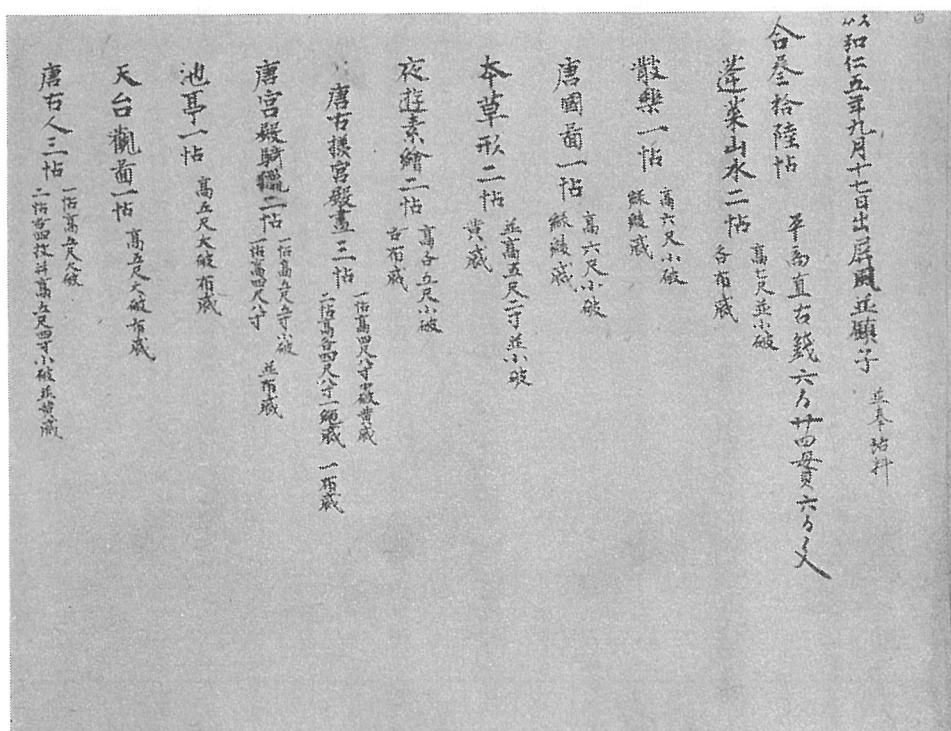
第一表で見られるとおり、出蔵品名が献物帳と一致するものは僅かに(イ)、(ロ)、(ハ)の三点に過ぎないが、名称に多少の差異があっても帖数や高さなどから推して相当と思われるものにそれぞれ充当した。ただ池亭と天台観とあるものは献物帳のどの屏風を指すのかその画題からは容易に推定することができないが、画屏風中の残る二帖、(ニ)山水画屏風を池亭に、(イ)百済画屏風を天台観にそれぞれ充てることとした。この(イ)(ニ)二帖の屏風は斉衡三年雜財物実録(以下斉衡実録という)にも載せていないから弘仁時の出蔵と見做してよいであらう。

さて夾縹屏風は、出蔵文書には単に十帖とあるのみで、珍宝帳所載の夾縹屏風九種五十五帖中の何れに当るかは、弘仁出蔵後における残高を示す斉衡実録に記す屏風数より逆算して決定するほかはない。繁雜であるが斉衡実録に列記する屏風を左に掲げた。

御屏風 (六十八) 帖

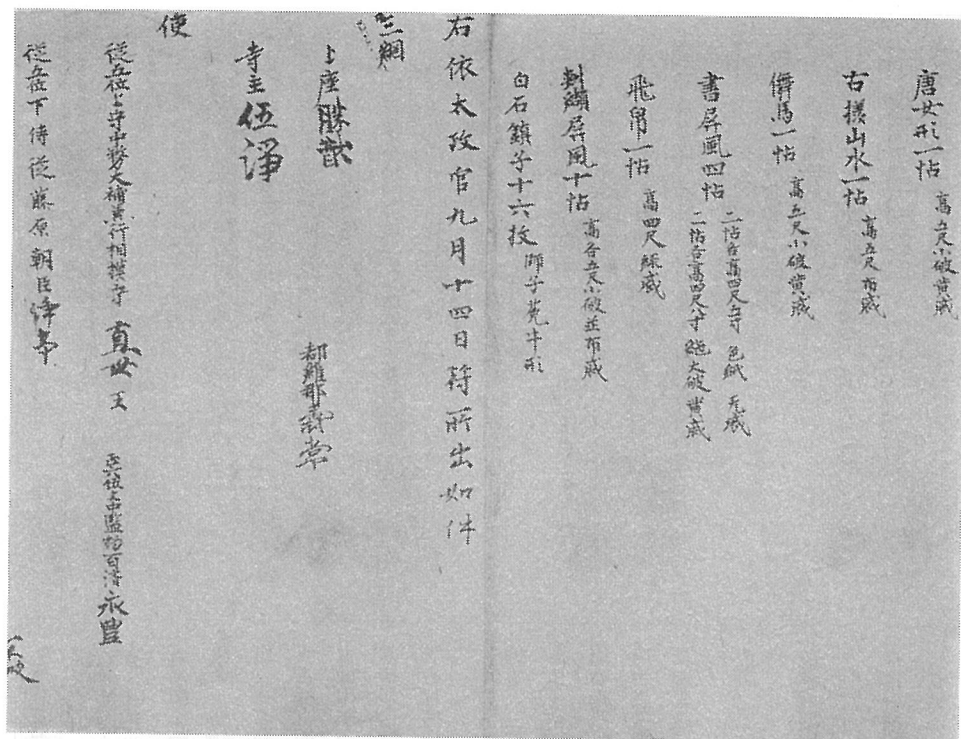
1 黒地師子鹿□屏風二□高五尺 (疊)

2 鶴形椽地菟縹屏風一疊高五尺 (菟縹)



雜物下帖

- 3 紫地青畫木屏風一疊(高五尺) (藕繖)
- 4 橡地象羊木屏風一疊(高五尺) (藕繖)
- 5 (牛力) 地虎木屏風一疊(高五尺) (藕繖)
- 6 赤地屏虎木屏風一疊 (藕繖)
- 7 紫地白青畫屏風二疊(高五尺) (藕繖)
- 8 鳥毛篆畫屏風一疊(高五尺) (藕繖)
- 9 鳥毛立(女)屏風一疊(高五尺) (藕繖)
- 10 鳥毛帖成文畫屏風一(書) (高五尺) (藕繖)
- 11 熊鷹鸞鳥武麟屏風一疊(高五尺五寸) (藕繖)
- 12 鶴鵝木屏風一疊(高五尺) (夾繖)
- 13 山(水夾)繖屏風十二疊(各高五尺) (夾繖)
- 14 鷹鵝草木屏風一疊(高五尺) (夾繖)
- 15 菴室草木鶴夾繖屏風六疊(高各五尺) (夾繖)
- 16 驕鹿草木夾繖屏風十二疊(高各五尺) (夾繖)
- 17 鹿草木夾繖屏風五疊(高各五尺) (夾繖)
- 18 鳥木石夾繖屏風(七) (夾繖)
- 19 鷹木夾繖屏風一疊(高五尺) (夾繖)
- 20 鷹鳥夾繖屏風二疊(高五尺) (夾繖)
- 21 鷹鶴夾繖屏風一疊(高五尺) (夾繖)
- 22 鳥草屏風一疊(高五尺) (夾繖)
- 23 鳥草夾繖屏風六疊(高各五尺) (夾繖)



倉 双 2 図挿

齊衡実録は蠹蝕が甚しく文字の湮滅欠損するところが少なくないので右のように補訂した。また藹・夾縹の字を省略したものは下欄括弧内に藹・夾の別を示した。

先ず屏風の総数は珍宝帳所載の百帖中から、弘仁出蔵沽却の画屏風二十一帖、鳥書屏風一帖、夾縹屏風十帖合計三十二帖を差引けば、残六十八帖となり、これが齊衡時の現在数であるから「御屏風□帖」とある欠字を六十八とした。すなわち列記する屏風1~7と11の十帖が藹縹屏風、8~10の三帖はいうまでもなく鳥毛屏風で、他の五十五帖はすべて夾縹屏風となるが、12鶴鴉木屏風一帖と14鷹鴉草木屏風一帖とは珍宝帳にはその名が見えないが、おそらく鳥木石夾縹屏風を指したものと推定してよいであろう。右の推定が許されるならば、18「鳥木石夾縹屏風□畳」の欠字は七となり、計九帖の同屏風は出入がなかったこととなる。以上により弘仁五年出蔵の夾縹屏風十帖の明細を知ることができる。すなわち第一表下段に示したとおりである。

なお齊衡実録により藹縹屏風の細目を知ることができる。珍宝帳や延暦六年、同十二年の曝涼帳、弘仁二年の官物勘録には藹縹屏風十帖と記すだけであるが、この齊衡実録には各帖の画題が記されていて、おおよその図様を知ることができる。現存する象と羊の藹縹屏風二扇は4「椽地象羊木屏風一畳」中のもの、また鷹と尾長鳥の屏風二扇は11「熊鷹鴉鳥武麟屏風一畳」中のものであろう。

(第一 表)

献 物 帳	双 倉 雜 物 下 帳	斉 衡 三 年 雜 財 物 実 録	備 考
(国家珍宝帳) 一 山水画屏風一具兩疊十二扇並高七尺二寸 闊二尺三寸半 搥布袋 二 国図屏風六扇 高六尺 広二尺一寸 緑綾襖 三 大唐勤政楼前觀衆図屏風六扇 高六尺 広二尺一寸 緑綾襖 四 大唐古様宮殿画屏風六扇 高五尺四寸五分 広二尺七寸五分 搥布袋 五 大唐古様宮殿画屏風六扇 高五尺 広一尺九寸 搥布袋 六 古様山水画屏風六扇 高五尺八分 広一尺九寸 黄綾袋 七 古様本草画屏風一具兩疊十二扇 高五尺三寸一 高五尺二寸 黄綾袋 八 子女画屏風六扇 高五尺 広一尺九寸 搥布袋 付紙「可謂古様 宮殿騎獵」 九 古人画屏風一具兩疊八扇 高五尺三寸 広一尺九寸 黄綾袋 一〇 舞馬屏風六扇 高五尺 広一尺八寸 黄綾袋 一一 子女屏風六扇 高五尺 広一尺八寸 搥布袋 一二 古様宮殿画屏風六扇 高五尺 広一尺八寸 搥布袋 一三 素画夜遊屏風一具兩疊十二扇 高五尺 広一尺八寸二分 搥布袋 一四 鳥毛篆書屏風六扇 高五尺 広一尺八寸 搥布袋 一五 鳥毛立女屏風六扇 高四尺六寸 広一尺九寸一分 搥布袋 一六 山水画屏風六扇 高五尺 広一尺九寸 黄綾袋 一七 鳥毛帖成文書屏風六扇 高五尺 広一尺九寸 搥布袋 一八 鳥書屏風六扇 高四尺一寸 広一尺六寸七分 緑綾袋 一九 百濟画屏風六扇 高四尺七寸 広一尺七寸 黄綾袋	(出藏名称) 蓬来山水二帖 高七尺 布袋 唐国図一帖 高六尺 緑綾袋 散楽一帖 高六尺 緑綾袋 唐古様宮殿騎獵二帖の一 高五尺五寸 布袋 唐古様宮殿画三帖の一 高四尺八寸 黄綾袋 古様山水一帖 高五尺 布袋 本草形二帖 高五尺二寸 黄綾袋 唐古様宮殿騎獵二帖の一 高四尺八寸 布袋 唐古人三帖の内二帖各四枚 高五尺四寸 黄綾袋 舞馬一帖 高五尺 黄綾袋 唐女形一帖 高五尺 黄綾袋 唐古様宮殿三帖の内一帖 高四尺八寸 布袋 夜遊素絵一帖 高五尺 布袋 池亭一帖 高五尺 布袋 飛帛一帖 高五尺 緑綾袋 天台観図一帖 高五尺 布袋	鳥毛篆書屏風一疊 高五尺 鳥毛立女屏風一疊 高五尺 鳥毛帖成文書屏風一疊	袋一口現存 現存 現存 現存

三 伝存の屏風

(イ) 献物帳所載の屏風

前述の如く、斉衡時における屏風残高六十八帖は、すべて一帖六扇の屏風であるから、総扇数は四百八扇となる。現存の屏風は、鳥毛篆書屏風以下四十扇とこれに大破骨だけとなったもの約三百六十扇が遺るから、斉衡以後の出蔵はなかったと考えられる。

さて現存の屏風は四十扇で、明治末年に作成された正倉院御物目録に

掲げる細目は次のとおりである。

鳥毛篆書屏風六扇

鳥毛立女屏風六扇

鳥毛帖成文書屏風六扇

山水夾縹屏風四扇

隣鹿草木夾縹屏風一扇

鳥木石夾縹屏風六扇

古人鳥夾縹屏風一扇

鳥草夾縹屏風六扇

縹縹屏風四扇

これらの屏風は天保・明治両度の修理により、鳥毛篆書（図版2）と鳥毛帖成文書屏風の二帖は、帖・背・縁および接扇などが改装されており、その他の屏風は仮表装のままとなっている。いずれも珍宝帳所載の



挿図3 古人鳥夾縹屏風

ものであるが、その中で隣鹿草木夾縹屏風一扇（図版3）とあるのは、珍宝帳付箋に同屏風十七帖をわけて隣鹿草木十二疊、鹿草木五疊とある後者の一扇で、鹿草木夾縹屏風というべきであろう。また夾縹屏風中の一扇を珍宝帳の古人鳥夾縹屏風（挿図第3図）に擬しているが、同屏風四帖は弘仁五年に悉皆出蔵され、斉衡実録にも見えないことは前節で述べたとおりである。今その図様を見るに大草花を上部におき、左右に花卉と人物を配するが、下方にもまた上部大草花の反転せるものをおく。おそらく下半の逸失せる二扇の画面を上下に配置して一扇に纏めあげたものと思われる。この屏風が、果たして珍宝帳所載のものか、あるいは帳外のものか姑く後考を俟つことにしたい。

その後新たに古裂断爛中より発見された屏風画面残闕に

山水夾縹屏風	六扇分	鹿草木夾縹屏風	七扇分
鳥草夾縹屏風	二扇分	菴室草木鶴夾縹屏風	一扇分
鳥木石夾縹屏風	四扇分	藤縹屏風残片（緑牛）	一扇分

がある。いずれも珍宝帳所載のもので二十一扇分に相当する。中に就て菴室草木鶴夾縹屏風と牛形藤縹屏風は初見のもので共に新資料として珍重すべきものといえよう。そして後者藤縹屏風は牛形にさらに白緑の彩色を加えたもので、屏風袋中に藤縹緑牛虎形と題書する屏風中のものであって、斉衡実録中の5□地□虎木屏風に当るものと推定される。また山水夾縹屏風中の三扇分はその図様既存のものと異り、両側に聳立する山岳を配した峡谷をあらわした別種のものである。

屏風にはそれぞれ付属の袋があったことは珍宝帳に註記するところである。現に遺存する袋は、大破、復原修理したもの五十九口で、残欠残片なるものが六十数片を数える。いずれも衿仕立の布製で、表面には円形・方形二種の花文を交互に配した褐色の摺模様をおくいわゆる措布袋である。その形状は、状袋様で両側に襷裂を入れ、口覆は長く約四〇乃至六〇匁ある。袋は、庸布をもって作られている。現に、袋に庸布銘をとどめるもの十数点存し、屏風袋には庸布が充てられていることを知る。当時庸布は長二丈八尺（約八三〇匁）、幅二尺四寸（約六八匁）を一段として輪納せられたものである。高五尺、広一尺八寸前後の六曲屏風を納める衿仕立の袋一口を製作するには、二十数尺を必要とする。以て一段の庸布をこれに充用したのは、端裂の生ずることが少なく経済的である理由によるものであらう。

袋には表に屏風名を記し、口覆の裏に「占部馬麻呂」または「矢田部咋万呂」の墨記がある。おそらく両人は、屏風袋の製作者と思われる。また藤夾縹屏風袋には屏風名の下に番号を付している。破損欠失のため番号の存するものは現在二十数口に過ぎないが、藤夾縹屏風には全部に番号を付せられたものと考えられる。この番号は、珍宝帳記載の順序に従って付せられたものと思われるが、番号の明らかなものを整理配列すると次頁の表（第二表）の如き結果となった。

「鳥形」とあるのは珍宝帳の鳥木石夾縹屏風九帖、鳥草夾縹屏風十帖、古人鳥夾縹屏風四帖のいずれかを指すものと思われるが、いずれと

珍寶帳所載屏風名數とその量	鳥形 鳥古鳥 草來鳥 額來額 額來額	九帖 九帖 九帖 九帖 九帖
	菴室草木鶴來額 七帖	
	山水來額 十二帖	
	驕鹿草木來額 (内五帖鹿形) 十七帖	
	鷹鷹鷹 鶴鳥木 來來來 額額額	一帖 一帖 一帖 一帖 一帖
	藤 額 十帖	

- 1 本表は袋に墨記する番号にもとづき、その順序を推定配列したものである。
- 2 「」内は袋に記す墨書を示す。
- 3 各項の末尾には番号を逸するもの、また半欠のため定位におくことができないものを掲げた。

も決定する資料がないから一応一〜二三の二十三帖を鳥形と推定した。

二四〜三〇は菴室草木鶴夾縹屏風七帖に当り、「廿四」と「卅」の二口が現存する。前の「鳥形」の内の「廿一」「廿二」の袋にも「菴室草木鶴」の墨書か「山水」「鳥形」などと併せ記されてゐるのは、時には山水屏風、また菴室草木屏風の袋として使用したことを物語っている。三一〜四二は山水夾縹屏風十二帖、四三〜五九は隣鹿草木夾縹屏風十七帖を指す。六〇〜六五は該当する袋は見出されないが、鷹木夾縹屏風一帖、鷹鳥夾縹屏風四帖および鷹鶴夾縹屏風一帖計六帖に推定した。六六〜七五は藤縹屏風十帖に当る。

屏風の袋（図版4）に番号を付すのは右のように藤夾縹屏風に限られている。現存する鳥毛篆書、鳥毛帖成文書、鳥毛立女の各屏風の袋には、それぞれ屏風名だけを記し番号は付けられていない。藤夾縹屏風には同種の屏風が幾帖もあり、何らかの必要により番号を付けたのであろうが、今は明らかにすることができない。

(ロ) 献物帳外の屏風

正倉院には別に鳥毛屏風残闕二扇が伝存する。いずれも鳥毛で、一扇は「唯行不易」の四字を篆書と楷書で、一扇は「正直為心神明所祐 禍福無門唯人所召」と楷書であらわされている。前者は胡粉地に篆書と楷書を二行であらわしたもので、珍宝帳の鳥毛篆書屏風とは文言も篆楷の配置も異にするが、その作法に共通性が認められる。後者は黄土地に文字をおき、その製作は珍宝帳の帖成文書屏風と全く同様である。当時こ

のような屏風が多数作られたことが知られる。この二扇の屏風の由緒は未詳であるが、おそらく東大寺に伝来したものであろう。今破損のため往時の装幀は失なわれ、また鳥毛文字も剝落しているが、珍宝帳所載の鳥毛屏風のように補修はなく、鳥毛貼付の手法をよく窺うことができる。なお篆書屏風は、文字の剝落が殊に甚しいが、「易」篆の書は鳥に象っていて、いわゆる鳥書をあらわしたものと思われる。

このほか仁王会に使用された屏風の袋が遺る。形状は献納屏風袋と全く同様であるが楷布の図様が異なる。表に「東大寺屏風袋 天平勝宝五年三月廿九日」と墨書し、背に屏風の図様を記す。続日本紀天平勝宝五年三月庚午（廿九日）の条に「於東大寺、設百高座講仁王経、是日飄風起説教不竟云々」とある。袋の日付により仁王会調度の屏風であったことが知られる。遺存する屏風袋は三口と一口の残欠に過ぎないが、かなり大量の屏風があったことと推想される。しかし今は一扇も伝わらない。

四 屏風の装幀と構造

屏風各部の名称は、献物帳の注記や延喜式内匠寮屏風製作の資料によると、

骨 下張 中張 面 背 縁 帖 帖角 接扇 銭形
等とある。以下各項目について、伝存する屏風残闕に基づいて略解を試みることとする。

骨 杉材、幅五糎内外、厚一・五乃至一・九糎の棧木を用いる。各扇の組方は豎三本、横五本で町形に組み、要所を木釘で止める（挿図第4図、本論末）。

下張 骨の表裏に麻布を張る。麻布は、匱い晒さぬ布を用いている。延喜式には、下張料として「商布」を載せる。現存の屏風下張布には、「常陸国交易」あるいは「武蔵国民部省交易布一段」などの墨書が残る（挿図第5図、本論末）。

布は二幅を横に使用したものが多く、これを四周の梓木に糊で貼るが、梓木の外側には密に釘孔の連続した痕跡が認められる。おそらく布を張るために釘を打ちめぐらし、糊の乾燥を待つて抜き取ったのであろう。糊は延喜式に「張布料糯米」とある。

中張 楮紙を五段に張り継ぐ。表のみに張り、背には中張を用いていない。中張紙には、古文書の故紙を用いたものがある（挿図第6図、本論末）。

面 表のこと。中張の上に本地を張る。本地は、現存の鳥毛屏風三帖は紙本、蕨夾額屏風はいうまでもなく絹本である（挿図第7図、本論末）。

背 碧縄を下張布の上に直接張つてある。献物帳によると、画屏風には碧綾のものが多く、書屏風中には白絹または白紙のものがある。

縁 幅約四糎の裂地を面の四方に貼りめぐらす。はじめに堅縁を貼り、後に上下の横縁を貼る。裂地は、画屏風などには錦、綾あるいは紗を用いたものがあつたが、蕨夾額屏風は小模様の夾額または夾額縄の縁

である。しかも蕨夾額屏風には、面も背も共に縁取りがなされている。縁裂には多く税帳（？）などの故紙で裏打を施している。

帖 各扇の四周に打付けた縁木で延喜式には「檜樽一村押料」とある。

正倉院の屏風帖木はすべて杉材を用いている。そして表面鋸釘の間に丹地に雲・鳥・蝶などを白色顔料で描き、その上全体に丹様の顔料を塗るものと、白緑または蘇芳色地に墨にて渦文を描き、その上に油様のものを塗つて褐色を呈するものとの二様が認められる。前者は、献物帳にいうところの染木画帖、後者は仮斑竹帖を指すものと思われる。

帖は、平頭の鋸釘で止め、両側に各十九本、上下に各七本を打つ。釘は鍔銅製で、頭には黒漆を塗る。献物帳のいわゆる烏油釘であろう。

帖角 各扇の四隅帖の上に打付け、角を保護するもので、延喜式に「脇金」とある。夾額屏風には紫革、蕨額屏風には鉄の帖角を用いていることが遺存の屏風残欠によって知られる。その他金銅、烏柴銅のものがあつたことが献物帳に記されている。

接扇 革または絶で各扇を繋ぎ合わせ蝶番の用をなす。延喜式に「緋繩番料」とあるが、献物帳にいう緋繩接扇のことである（挿図第8図、本論末）。現存の屏風は接扇破壊各扇離脱して六曲の用をなさないが、

僅かに夾額屏風骨残欠中の一帖六扇に一例を遺す。この屏風は、画面は殆んど逸しているが、接扇の旧状を辛うじて保っている。すなわち麻布の心を入れた緋繩を帯状に作り、相接する左右の扇の各梓木の側

面に糊着し、木釘にて止め、その上に帖木を張る。そして接扇は、第一扇と第二扇の間は前面に、第二扇と第三扇の間は背後にと交互に取付ける。従って屏風は接扇の取付けた方へのみ屈折するだけで、近世の紙蝶番屏風の如く前後いずれの方にも屈曲するものと甚だ趣を異にする。

銭形 献物帳には記されていないが、延喜式には「紫革一枚銭形料」とある。各扇面の縁裂上、左右各三所に貼付し、屏風を折り畳んだ際に面と面とが相接触して磨れ損するを防ぐためのものである。現存するものに紫革や黒柿などがある。形は、革製には八花形と円形の二種があり、木造のものは円形輻輳引で表面に重圈を造り出し、胡粉、緑青、朱などで小花文を点じたものがある。その屏風面への取付け方は、釘止めと接着剤で貼付するものがある。鳥毛篆書屏風には黒柿製の銭形が所々に残る。

要するに、正倉院に伝存する屏風は、朽破甚しいとはいえず、当時の屏風の構造を知る唯一の資料たることはいうまでもない。しかしながら献物帳によれば、これらの屏風のほかに、碧牙、紅牙撥鏤の帖、金銅浮漚の釘などで装幀されたすこぶる華麗な国図屏風や下端八寸半ばかりを透し漆木骨だけを現わすという奇珍な装幀の欧陽詢真跡屏風のあったことが知られるが、既に出蔵されて、今は献物帳の註記によってそれを想像するに過ぎない。

註

1 国家珍宝帳には御屏風壹佰壹の注に「盡屏風廿一疊 鳥毛屏風三疊 鳥畫屏風一疊 夾纈六十五疊 藤纈十疊」と記す。盡屏風は畫屏風、鳥畫屏風は鳥畫屏風の誤記である。

2 大鳥義脩「正倉院御物屏風について」（寧楽十五 続正倉院史論 昭和七・一一）

3 国家珍宝帳には鷹鳥夾纈屏風四疊の内二疊に「鳥木」の付箋がある。従ってこの時出蔵されたのはこの二疊であり、鷹鳥夾纈屏風二疊が残存、斉衡実録の記載に合う。

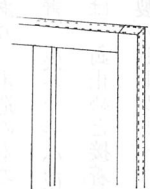
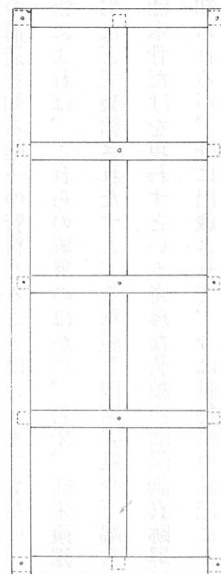
4 延喜式十七、内匠寮伊勢初齊院装束

五尺屏風四帖料、梶樽十村料、檜樽一村料、（中略）熟銅大三斤十二両、作脇半熟金料銅大十二斤銅釘、（中略）白綾十二丈四尺、表料縹纈十二丈四尺、裏料紫綾五丈六尺、縁料緋纈二丈、番調布二丈、張料商布九段一丈五尺、下張練糸一両、中張布紙二百五十張、中張薄紙五十六張、綠紫革一枚、長二尺五寸、膠小四両、塗綠石灰八合、合麥糯米八升、張布料小麦一斗二升張紙、（下略）

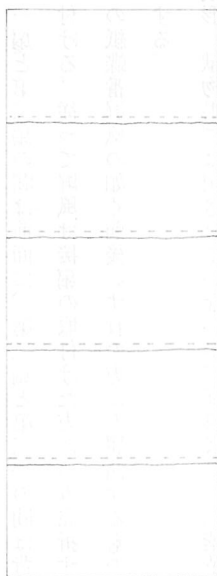
5 現在鳥毛篆書屏風と鳥毛帖成文書屏風の接扇は、各扇の縁上下二ヶ所に孔を穿ち組緒を貫いて六扇を連続するようにしつらえている。この装置があたかも天平の古制の如く伝えられているが、これは元禄あるいは天保度の修理に際し改装されたものである。

（正倉院事務所宝物調査員）

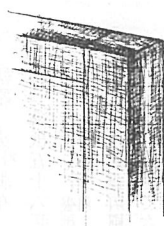
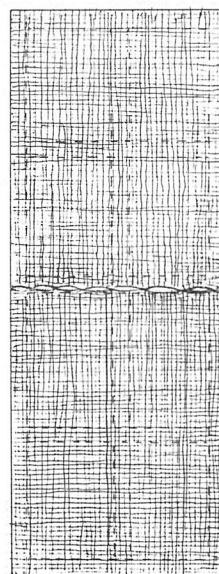
4 骨 組



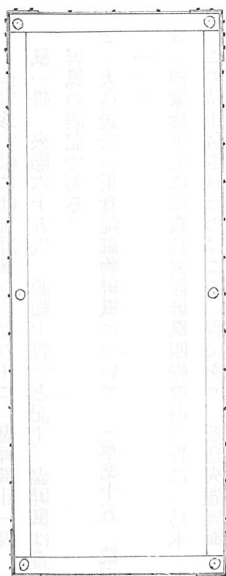
6 中 張 紙

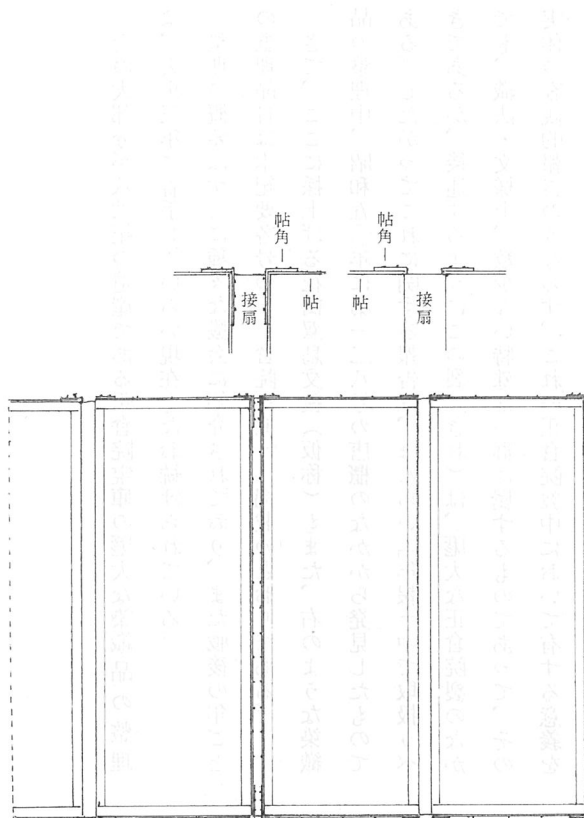


5 下 張 布

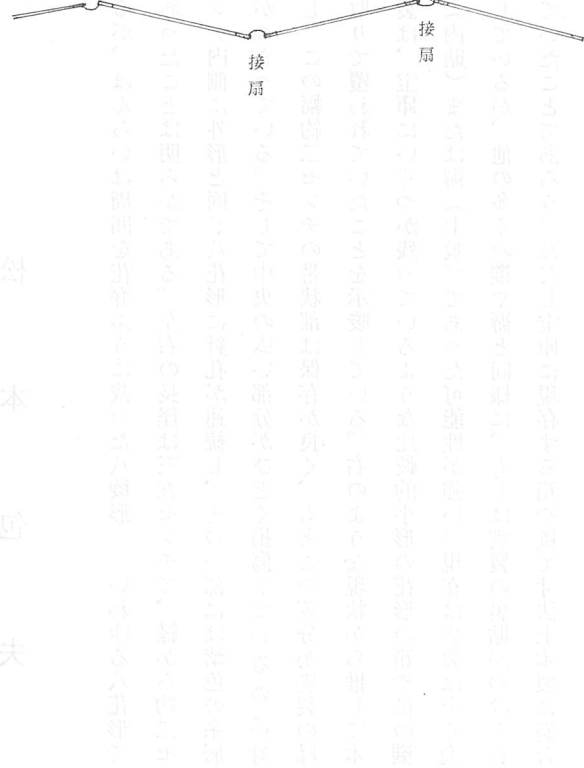


7 面

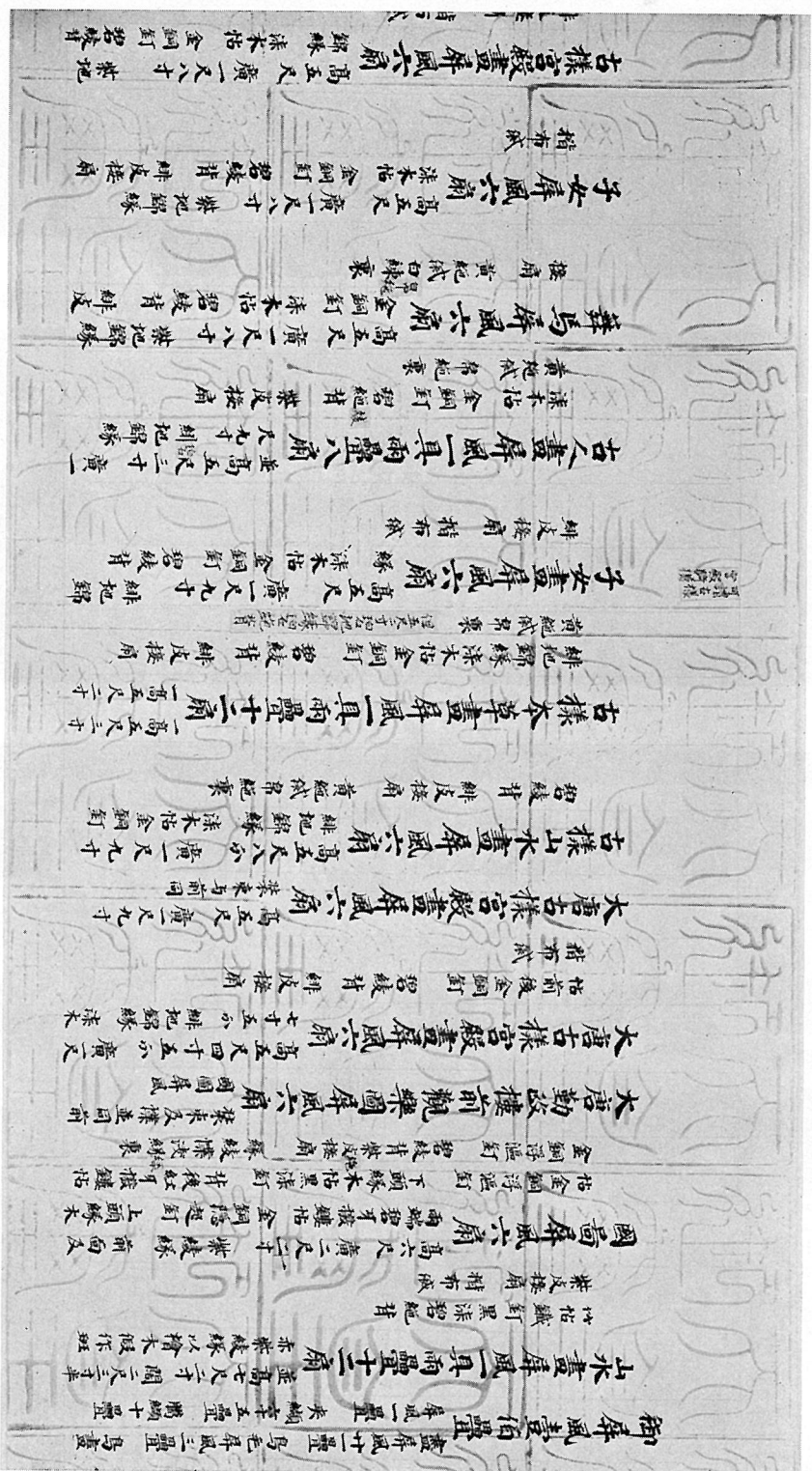




8 接 扇



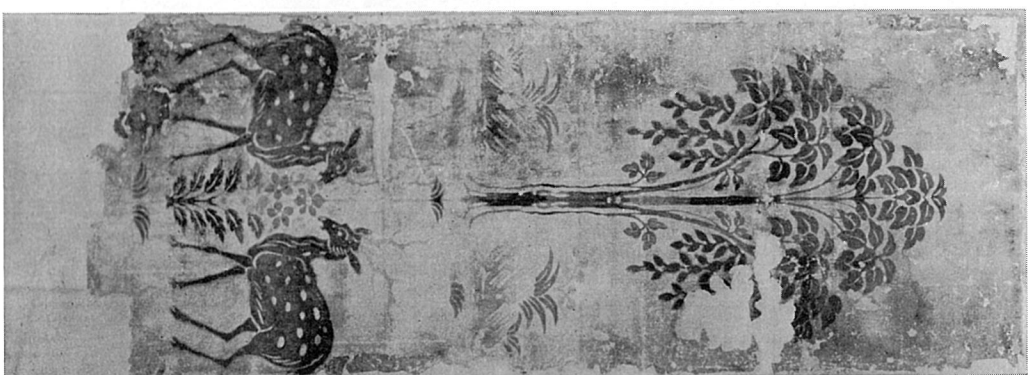
本 書 文 献 二 十 一



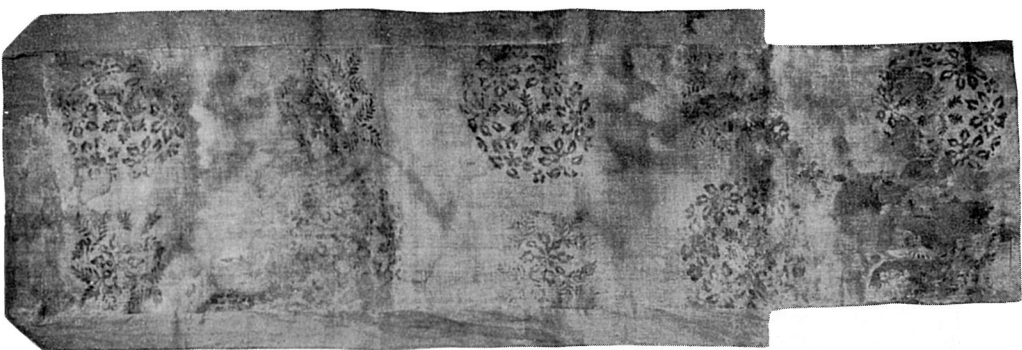
1 東大寺献物帳 (国家珍宝帳) 天平勝宝八歳六月廿一日



2 鳥毛家書屏風第一扇、第二扇



3 鹿草大夾額屏風



4 摺布屏風袋 (墨書、夾額鹿形五十口)